学べるゲラ

第130回 中国の「パンダ外交」

※2025年10月の毎日新聞記事を元にした文章です。
校閲し、直すべきところを指摘してください。

日本からジャイアントパンダが姿を消しつつある。国内の飼育施設にいる2頭の返還期限が約4カ月後に迫り、次にパンダがやってくる見通しは立っていない。10月28日は半世紀前、日本と中国の国交正常化を機に2頭が来日した記念すべき日だ。「パンダ外交」とも呼ばれる政治的な案件だが、目下の中国は、タカ派とされる高市早苗首相への警戒感を拭えずにいる。

まずは現状のパンダ事情から簡単にまとめておきたい。かつては中国からプレゼントされることもあったが、近年は「繁殖の学術研究」目的のみで貸し出されている。日本で生まれた個体を除き、所有権は中国にある。

2025年6月には和歌山県白浜町のレジャー施設「アドベンチャーワールド」で飼育していた4頭が中国に返還された。現在、国内に残るパンダは東京・上野動物園にいる双子、雄のシャオシャオと雌のレイレイの2頭。いずれも26年2月20日に返還期限を迎える。

最近でも自民党の政治家が訪中時などにパンダの貸与を求めていることなどが報じられてきたが、中国側から明確な返事はないとされる。

果たして、日本に再びパンダはや

ってくるのか。「中国パンダ外交史」（講談社）などの著作で知られる家永真幸・東京女子大教授（アジア国際関係論）にズバリ聞いてみた。

「今上野にいるシャオシャオとレイレイがそろって返還となり、国内の施設で展示されているパンダが一時的にゼロとなる可能性は十分ありえると思いますよ。上野の２頭は双子。『繁殖の学術研究』という観点からは……２頭一緒には残しずらいはずです」と、実にドライに語るのだ。

家永さんによると中国の「パンダ外交」の起源は１９４０年代、日中戦争の時代までさかのぼる。「中華民国の国民党政府は重慶に撤退。戦況を挽回するため、国際社会に正義の同情を買おうとしていた。目をつけたのが欧米で人気が多いパンダでした」

国民党を率いた蔣介石の妻、宋美玲が２頭のパンダを米国に送り、これが現地で人気を呼んだのだという。

「冷戦期に入ると、米国では60年代のニクソン大統領訪中、そして日本だとご存じの通り田中角栄首相の訪中に伴う日中国交正常化といった節目に合わせてパンダが中国側から送られてきたわけです」

日本では長らく、パンダを「友好のシンボル」という形で受け入れてきたが、日中間では２０１０年の中国漁船衝突事件や12年の尖閣諸島（沖縄県宮古島市）国有化などを経て、必ずしも良好とはいえない空気が漂いながら、今に至る。

「中国の『パンダ外交』は日本のみならずほかの国に対しても１９９０年代以降変化したとみられています。84年にはワシントン条約で『最も絶滅危惧のレベルが高い生き物（付属書1）』に分類され、国際取引が禁じられました。パンダは『中国の宝物』としていっそう存在

感を高め、最近は中国の環境保護政策のアピールにも重要な役割を果たしています」

近年、中国は政治と経済、繁殖の将来性なども複合的に考えて各国にパンダを貸し出す傾向が強まっている、と家永さんはみる。

「中国はまあ、日本の世論を見ていると思うんですよ」。パンダは外交官のエースともよく言われる。

「今、日本にパンダを貸しても半世紀前のようなブームは起きない。自分の国の宝物を貸し出すとして、いきなり『いらない』と言われたら――という懸念があるじゃないですか。一方で貸さなければ『なんで』と言われるリスクも計算しているんじゃないですかねえ」

振り返ると「パンダなんて、いなくてもいい」とか、うまくいかない日中関係をあおるような日本の政治家の発言も確かにあった。そして、日本は高市政権へと移行。中国では靖国神社への参拝暦や、日本の防衛費の増額を主張していることなどがスポットライトに当たっているようだ。

「実はね、政治的にも経済的にも、日本以上に激しく争っているはずの米国の動物園にも中国は最近、パンダを貸し出しているんですよ」と家永さんが教えてくれた。日本の国際的地位が下がる中でのパンダ外交も容易ではないだろう。